

霞ヶ浦北浦も冷夏だった

今年の夏は近年にない異常な冷夏で、新聞やテレビのニュースなどで、農作物に大きな被害が出ていると、連日のように報道されています。

霞ヶ浦北浦の水温は、気温に大きく左右されることが予想され、魚類生産にも影響を及ぼすことが考えられますが、ここでは先ず、この冷夏が霞ヶ浦北浦の水質環境に、どう影響したかを見てみました。

右の図は、内水試の棧橋で毎日測定している、表面水温の月平均の推移を示したものです。

図には、平成3年と4年そして今年と、3ヶ年の1～12月の月平均水温の変化が表されています。

これによりますと、平成3年と4年とを比べてみますと、5～6月の期間で、昨年は水温が低くなっていました。

昨年、養殖コイの成長があまり良くなかった、という声が聞かれましたが、それはこの時期の水温が低かったことによるものではないかと考えられていました。

さて、今年はどうかといえますと、一番水温が高くなる7～8月に、水温が全く上っていません。

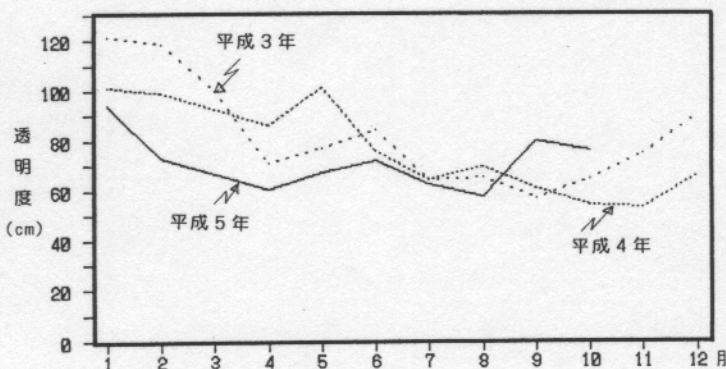
例年ですと霞ヶ浦北浦で、表面水温が30℃を越える日が度々ありますが、今年は全く見られませんでした。

霞ヶ浦北浦も異常な低水温であった、ということができます。

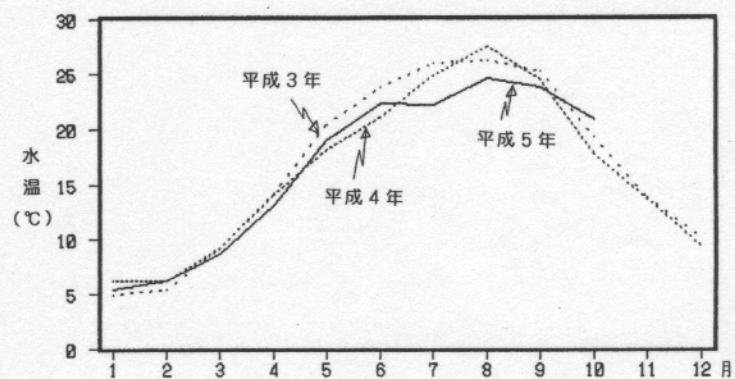
このような異常な低水温が、植物プランクトンの発生に、どのような影響を及ぼしていたのでしょうか。

植物プランクトンの発生量は、水の澄み具合を表す「透明度」で、大まかには見ることができます。

(透明度は直径30cmの白色円盤を水中に沈め、白色円盤が見えなくなった深さで表します。)



内水試棧橋における月別平均透明度の推移



内水試棧橋における月別平均表面水温の推移

透明度の値が大きいと、植物プランクトンの発生量は少なく、小さいと発生量が多いことになります。

左の図は、水温の変化を示した場合と同じく、過去3ヶ年の透明度の推移を見たものです

これによると今年の大きな特徴は、昨年の冬から引き続いて、透明度が低いということです。

ただし、この低い状態は6月ぐらまでで、水温の低かった7～8月は、昨年、一昨年の透明度の値と、あまり変わっていません。

また、ここ数年、かつてのようなアオコの大発生は、見られなくなっていますので、今年の夏、アオコが出なかったのは、冷夏のためばかりとはいえません。

このような透明度の状況は、北浦でも全く同様に見られています。